



老葉

上ノ葉
林ノ葉

伊地知文庫
文庫20
77
2



文庫20
77
2

愚句老葉第三

伊地知氏書冊

練連歌

くさありのよまうふに月

あつさう来らうう身練い来て

上^自弦より下弦乃月まてを公よ

うをくしと也

上^七弦下弦乃公もや秋奏頭乃

公也

いつらまひなを古里

柳ららわれ川風を物吹く

いつらまひなを物吹く

てらや古里まひなをたり

いほらまひなを物吹く

の吹物ら古里まひなを柳をたり



蓮のくはふ家もさるるか

日くくは鳴く夕風月出く

^自蓮の房は月れあひはれく

日吹れなくきそりあつめく

景気下はこれいゆ人の念也

^長蓮の房は月の中らとあはみ

くはなをとせしはくはくは

松たぐく

夕はこれ蓮れは葉玉こく

涼しくなりぬ日くくはくは

扇乃くはくはくはくは

^自夕はよ天れ河系乃音とく

扇をよ向たすわれは天川の音

れをよきくはくはくはくは

天川扇乃風は音とくはくは

くはくはくはくはくはくは

^長天河扇れくはくは

くはくはくはくはくは

星よ手向乃扇れ玉系

^自前向の野は臺乃くはくは

れ手向乃地をくはくはくは

くはくはくはくはくはくは

あはくはくはくはくは

^長前向野は臺乃くはくは

七夕祭よ手向乃地星れくは

くはくはくはくはくはくは

くはくはくはくはくは

くはくはくはくはくは

自
夕ぐれのこゝろあつれは様来て
しりぞよ風あ萩れ言のこゝして
ちよこひくまこひて也

夕ぐれのこゝろあつれは様来て
萩れをうそ有物そしなりけ
句の直よすゆり

夕ぐれのこゝろあつれは様来て
さひくそいそひの萩よ風也
萩のこゝろあつれは様来て

夕ぐれのこゝろあつれは様来て
さひくそいそひの萩よ風也
萩のこゝろあつれは様来て

夕ぐれのこゝろあつれは様来て
さひくそいそひの萩よ風也
萩のこゝろあつれは様来て

夕ぐれのこゝろあつれは様来て
さひくそいそひの萩よ風也
萩のこゝろあつれは様来て

夕ぐれのこゝろあつれは様来て
さひくそいそひの萩よ風也
萩のこゝろあつれは様来て

夕ぐれのこゝろあつれは様来て
さひくそいそひの萩よ風也
萩のこゝろあつれは様来て

夕ぐれのこゝろあつれは様来て
さひくそいそひの萩よ風也
萩のこゝろあつれは様来て

夕ぐれのこゝろあつれは様来て
さひくそいそひの萩よ風也
萩のこゝろあつれは様来て

自
唱と初をし作らば初と向は色も
し初るなり

長
うたのりや月と夜と

小
小萩のりや初れは河の初宿て
初れは夢れ身と初知ん

自
初れはよ公みけの草花店
草花店よ小極五の初真れ初

長
心より初れはうきと色初り

長
け草花よ何人権と極て世は
なを初初るなりと云也

自
初れは夢れ身と初初初
初れは初初初と初初初

長
初れは夢れ世と初初初
初れは夢れ世と初初初

407
種と後とんた初初初初初

自
公より初初初初初の初長

自
うたのりや初初初初初
さきと外よ初初初初初

長
心は初也

初初初初初初初初初

自
初初初初初初初初初

初初初初初初初初初
初初初初初初初初初

長
初初初初初初初初初

初初初初初初初初初
初初初初初初初初初

初初初初初初初初初
初初初初初初初初初

昔人そむく萩の一本

花すきし袖もきよくもまほしん

自 聖在乃人こころよまほしん

自 向いんくゆらぬまほしん

長 萩乃さ波をく

萩乃さ波をく

山きく月い入花れ花き

自 花き月乃花よむまほしん

自 町くい萩のそ花をけし妹を

花れ花きまんとつ

萩乃花れ入花すは花尾花

い

萩乃花れ花きまんとつ

い

人をまぬ尾上乃花れ花き

自 花きれままらまほしん

自 花きれままらまほしん

花きれままらまほしん

花きれままらまほしん

花きれままらまほしん

花きれままらまほしん

自 花きれままらまほしん

自 花きれままらまほしん

自 花きれままらまほしん

自 花きれままらまほしん

自 花きれままらまほしん

自 花きれままらまほしん

中りわすか海あきらけり

^長けさ海は平よなりと石こなれ

月よ出木架れわひらと酒の千

とつりれ鏡乃をいりしや

と秋半乃輝のよる月

^肩心もあきらむるなり

^長水の神よつら月をさそふれい

こふし而輝乃をかりけり

公の時也

^長お柴よ海さあのみきり

月中もなれ若恒あそそく

そのつらかりとつらきんよ

^肩中すそ水に帯りぬ月すそ

山向の世弄命よ出一つ

雁過長空影沈寒水雁を遺

蹤憶水空沈影意のなや思

念又自然乃相也平等大惠園

よふおぬ駒りやいふひゆん一葉

^長菩提駒鳴平等大惠園

水に月とやまん心しゆしとん

たおとをのつらかりとつら

へしとつらと云およ公ありしとや

け句の連弄命乃句也行の沈思

乃おしや

日よくれとれ雪をれさひと

^肩舟をむら入江の東月出く

日乃言しとつらとつらとつら

れ海上の月うらつらとつらと

長 おりくをかりしり
江東日暮雲

長 ききく水の岩つとま
あつた月夕垣つら
公ゆ也

公うきういあしれ

自 今も公えあつた
友とあつたよおつた

長 山はれ古事友とあつた
古れといらあ

とまといらあ

自 月とあつた
あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

このとちり

長
晴く散れほし川にれをらり
まうすけしと乃あすのそくた
け三句公由也毎句ほれ曇る心を
つづくまきまや

よと雲を穿りて来の恨を

西よゆり しのくれ月

長
横言に東月の西よとらふれ
さ西をりし恨にらあれ恨もや

まらうらよ伝来し里に静と如

あれそこちかき深き月

長
けはる内は月とまらうられまや

野もまらうらとちりてつとん

らよまらやに君にこそむ

謝
あれまら月をまらま

すまらまらまらあれほれ

まらまらまら松虫のまらあ人

まらまらまらまら沙の月

月
いつまらまらあつふ

福のまらまらまらあれ福

月
いあまらまらまらあれ月と

公にならまらまらまらあれ

れまらまらまらあれ福のまら

まらまらまらまらあれ思のまら

まらまらまらまらあれまら

けまらまらまらあれまら

れまらまらまらあれまら

まらまらまらまらあれまら

せれうにふあしうをさや出てん
なまの月よこの心おん
^月月れいなるれいなる世一よ
信ゆらうらうら出ておん信ん公
んとおりおり
^長公いぬ也

いとそま公れまのまらや
^有老れ初是乃楳のよ乃月
公れまのまらや公あふんま
や乃月よいぬ也
おりひくまなまをわへわらふ
おつひくまを楳乃よの月
^長公れまのまらや公あふん初あ
や乃月よいつらなま

おりひくま下略

^長老れ楳乃なまをまらま
^長二年りやうらと楳乃と
初あし楳乃らま
^自うまの月れ未乃ひま
公いおとらぬ雪まらひまを
ひましくなをり家又限あらを
ふまをいなるふあひ初
おりひまを白の作り作りせれま
く定なきをいぬ也

^長公いぬ也乃ひれ未乃月れまら
一表よりたなれ付
^自秋の月懐くこれ空をく
宵れ下ハまを初官ししうらま

山と月の新井村にて

秋の朝月花家乃むら

文よれ去らんそおやすしと

秋の朝月と花家乃村温ま

流しひるんそおやす

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

心と中しすあれをけと

出れ者よあしとやすみくせり
聖路の味もせんく行くま
た見えおとらぬ也

長
け二句又心河艶しくて出れ者
よ終方言くくふらひのつれ
へふあす

余春と限れあまをひん
草葉よんく松ゆれ
そのれ松虫乃た紅名の有なる
とそめく竹ゆり

公の也源氏鈴出れ老ふ名
くく余れ行とうふさ出さ
あらんき公よまうせて人きぬぞ
山とらり江整れ松忽よ春ゆ

まぬとく公あらし出ふかむ有ける

如藤れまよすらせ甲

自
松虫乃あし今年もあらひ
花を好くこよと人や下草よ
はまわしひくく人さん
長川弄周

まらくはかぬ月小あきて

自
月文ゆきい庭上れ落も打あかり
や寒罌切ようらそくらぬ也

初霜まうし居乃か
まらをたれれ精色つと

自
く山とれ味のよまじれ時節也
長
け二句又公ぬ也落らる長のさ

后乃未あらざに此葉をよ公とつあ
てと侍るまよや

長中
あつてかたあを此種風

自
夜ふ月乃山里あつあつ

樹蒼々としてあつあつ

あつて文月すきてあつあつ

ふらふら山う神れ色なら

自
白妙乃夜ふらあつ月あつ

ふらふら山う神れ色をわ色に

白妙れ石乃月よしらとつあつ

わすすすつあつ

自
白妙乃夜月れ光ふら山と

神れ色とあつあつあつあつ

あつあつ白妙乃夜ふらあつ

夕鳥れあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

自
小山田と鹿とあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

自
小舟れあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつ

自 居乃なく堀江に沖より見て
難波とやられりねよ松浦舟
中んたを御りして楫言りする
たつ曉りりくとかさく月下
唱さるんハ夜なり一りや

堀江ハ難波城は也居さるなり
うり言さるることとや言ふ

鳥つらつくれ池乃長言ひさ
朝日さす境のちねよ居さるて

各名れ島よ名鳥城さ也但是ハ
鳥さくことゆらよそ中乃居たり
池乃長開けさハ境乃ちねよ朝日此
さして居乃さるるさる酒さくハ

あささるをかりや

都れ城も秋の長さよ

自 居のなくを山つり明甲て

長の長さよ山つり縁と花さる
たるく山つりハ曉乃ちのちや
長法不遠

吹風さるく 溪川乃林

自 居れねらけりさ乃花行く

自 向石れおよハ心なり

枕さささあぬじんよ月定て

自 舟よ居なくあつさの海

旅泊乃さるハの月まじり御言
さるハ曉朝居乃一さるやあさ
あささる居れをさよさるさる水

旁々鹿漆乃山やさるん

わふおとゆわのさうをさ

^自 正れきり内節乃意気也

藤福すりあふれ漆よすゆ也

鹿の音おろとさこれ松風

山いつくそそ妹身ゆら

とらなく至れ店乃意気也

^自 山いつくそと眼あつたさる

長注同

かよさうあふんまあつて

笛をつらたり鹿乃意気也

^自 思意いあう鹿乃力よあ

らふ心とて人れささこれ笛と

まや合うまひあんと竹の笛

△感平鹿笛と云地不審なりし

一年丹波乃市のやうつら

れ物事りはさるる作ら

物人れさう行あひくたれ

和歌をさしてあつて

志傳り祇尾寺れ麓の人也

そこして程ささき堂にやう

ちら結つら笛足さ終り

はらうつらすさつさるる

らうつらとせんらうり

とせゆらぬ行よと人れ

只今れは乃わさひつき

たささき世甲れとさあ

うさやまあつてさう

作りぬ句れさよりよいなを地
なす

ととれなをさふりしはあふ山

自 唐をたふまふさふおとやあふん
ととれ旧たふなをさののうゆ

とく久してなをせゆや

自 けさ句いつきと足して作りさゆれと

れささのいまあよあわれ唐の旧や

さるのいれはら至は句はたを除

人れさるのうら世中

自 神といひいふなり町をくさる言

一句よ百句付の節句くやんゆ也

長住ゆあ

力を候よなりてし袖あきあ

自 岩本とよらりし妹れさ言

自 其理あふ也

自 岩本と妹のうらをゆきと力を

候よなりてし袖あきあ

ゆれおと表をりりり

自 かわれ志むをよせれ妹れさ

自 け表の威をりし中をれゆら

いふとらひ結れ深るんの心也

自 け表の威をりし中をれゆら

自 雨結人なり

とらうきまてし知人を知

自 心るに妹れ結えといふをん

自 けささるらとらうきまてし知

自 妹れ結え乃心なり

とふめら佐右と知人と云ふ事
遠方より来りて下略此等乃
佐右の心をうきをゆるかりて
とらぬ心と有り見ゆらや

月と云ふらんよきわら糸袖
云々

自
うくつとき妹の心は何も
妹といふ抱の心はあつ何事
仇なりそや抱りて人月と云
子と云ふ心からなとてあて付ゆ也

云々
いづくもあつ流らと云

自
いづこもあつおとの妹を云ふん
とてやすと云ふと命と人毎
と抱といふと云ふよ吹きあつた
と云ふ心也

のこふれり方と云ふん

自
風と云ふ妹の原本の命と見て
妹を云ふよ吹く我を羽山
何乃草来りれと云ふと云

誰と油ひすまゝと云ふと云
本の上と見てあつ命を云ふ心也
妹を云ふ四方よ下略け付ゆら

自
なをとなと云ふ袖よあまれ
あまも本と云ふと云ふあつ世よ
何と云ふ方よあまらまてと云ふと云
何と云ふおとと世中と云ふと云ふ
草来りあ乃命際と見て云ふ心也

云々
公いぬ也

おりけれおのりか流し
未未おのり桃雲乃林
桃園文樞文院け下よ任法
しう今ハ古文とたり樞の意
さむしよ公也

桃園都より下自注同

月乃入宇治れ山本おのり

自 樞乃案一不乾雲の林凡

宇治よ樞保氏把法より出より

奇合也おのり時節れ景氣む

うとくきく公と付志也

宇治の巻よ三ゆ

つとふさふいと公とさうん

枯れ下案乃林れしと案

難面の模公とみとておのり
うららさわりさすまん山集

まはららるるおのり下店

山居れ人まひつとあささまは案

れお案すらるるありま案は

ふみまらるる信まららるる

神くおのりなるとおのりあ

おなりおのりおのり山れ樞案

のそとみおのり山れマあまし

けりなると

あ言しとらをれ川つら

自 舟のわら林れ山本おのり

沙麓暮鐘声乃林の景を

けふらまのせけん

廿三句抄より南条の真乳子
心と付ゆ〜也

親と云ふ月乃と云ふ

自 妹はと云ふおれと云ふ

二句句ハ日敷乃又日を色と付

不ハ津乃くおれと云ふと云ふ也

妹はと云ふおれと云ふのおまは在

秋と云ふと云ふおれ乃と云ふ

在の月と云ふと云ふ人

おハ妹と云ふおれと云ふおハ妹

妹と云ふと云ふおハ妹

人れおれと云ふと云ふおハ妹

よあると云ふ妹と云ふおハ妹

てと云ふと云ふおハ妹

長 大切よおれと云ふと云ふおハ妹

廿日乃月と云ふおれと云ふ乃山乃月

よつと云ふおれと云ふおハ妹

おハ妹と云ふおハ妹

人よと云ふおハ妹

自 立回れ山と云ふ妹れと云ふ

おハ妹と云ふおハ妹

自 妹はと云ふ

おハ妹と云ふおハ妹

長 妹はと云ふおハ妹

おハ妹と云ふおハ妹

おハ妹と云ふおハ妹

おハ妹と云ふおハ妹

おハ妹と云ふおハ妹

長
立田山よりれお紫乃をこして
松いへくまぬ物くへはあら

本れるよ白泥おくの流波

大井川末いあへよお紫して

自
流つりの谷れ小川乃をこつてい

本紫や水乃町魚をくせん

水よお紫をくこく大井川

ひくくみゆら流れしつと

大井川ちるお紫よりりこく

となせれし流のまのこくす

河水れお紫しつとく

河よや大井川乃風系言流れ

さ月なへ

お紫くくお紫をく

うらるとこれいよ乃流波

何よつとくく先陰とたぐく心

是とん彼とくくお紫乃流

力とくくお紫

いづれまお紫しつとく

さのよお紫しつとく

世中乃盛衰と始るよ紫とく

流

け向く折らるまへん世もれ

盛衰れ衣とくお紫入つとく

人いりりぬ山王乃流

お紫らるお紫をく

お紫れは廉れ立れお紫をく

うつとんお紫をく人論の流

まあ〜鳴也と付ゆり

くぢ、林れ倍の岡けさ

お茶ちり江いさ〜れ若し

貴亭〜すあは〜一産乃内

〜や向ふの義なり

都をいかに秋よ〜馬や

紅紫をうさ〜菊とゆり山

白しほさ菊とまお〜いさお

茶と〜さとおゆ〜乃山と

〜く秋とさるし〜おと心也

心〜み〜さるま〜や紅紫ちり江

心をやりて〜ゆん〜

ゆ〜れあ〜さ〜と〜やおらん

ま〜ゆ〜り〜菊江〜ね〜と〜おら

九月九日一日の上下ゆ〜れて菊

をゆ〜さす所おと〜い〜さる志也

ゆ〜垣内なり〜まゆ〜と〜や

な〜ん又暮れ〜をゆ〜の心也

な〜いな〜らんや心〜と〜い〜せ

ゆ〜す

暮れ乃〜けお〜や

〜位〜に壁か〜れ〜さ〜り〜と

い〜ま〜く〜草れ〜露の世甲

力とゆ〜ら〜と〜鐘の冷〜

黒髪〜今〜霜おれ〜体〜と〜く

黒髪〜今〜白〜く〜な〜と〜り〜ゆ〜れ

え〜ん〜ら〜り〜な〜れ〜お〜れ〜よ〜ゆ〜え

清〜ふ〜ゆ〜り〜さ〜り〜し〜ま〜夜

廿二句人及てゆくやららるる今
ハ君をなと詞つさかたやいゆま

本葉なかりし山川乃末

いささかきりし木々の風

あつたかく掌れあはれはるく

あつたさゆあつたさふはは言て

おろし入身はあつたさははあ

あつたさ未やこころの風

長引平おね

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

あつたさあつたさあつたさあつたさ

愚句老翁第四

冬連歌

さしきりりり神垣の色

山風よと室れ枯冬をこして

神垣れまじりとほららるゝ社乃

公也名取よいりてありてすは

向い名取也冬と云字をうたれい

枯乃冬枯れくわいりり枯地也

とむらり神垣とありふ吟吟枯木

神垣れれと室乃山よ冬を色と

ゆりりりりりりりりりりりりり

神垣き乃まむられ山よ下略

さしきりりりりりりりりりりりり

白くくく味すー

香とゆらぐき乃山のと
袖せうはまの時ぬれを乃ゆらぐよ
時ぬれをくけあき乃ゆらぐ不遠
山白くとみゆきいつありの
香よとゆらぐ

あしゆく山乃法とこれ
昔もこの麓に月乃一と流
平なを月のあるきれを
と秋戸くく時ぬれ凡そあきて
いつきて打くくも一と流乃
ゆらぐ端的也とと吟味とあ
むらぐ

都世のあ時乃まを記
時ぬれと山れ店よ結ひ結定して

三句又うらりるさゆらぐと時ぬ
と凡そ身まうくとの端的れと月
とくゆらぐ

誰かまとして袖あきん
うらぐれあきゆらぐ時ぬ
見波乃古ゆととまうくゆらぐ
いつあき袖かつ井よとゆらぐ
数よかりとゆらぐとゆらぐと流
ととと先年ゆらぐ

吉人とゆらぐ出ら秋の時ぬとと
なとととといらやみ文字ゆらぐ
命別あき

うらぐゆらぐゆらぐゆらぐ
木葉ゆらぐゆらぐゆらぐ

都とさびしきとこれぞ山

そとふききき山寺に静をく

源氏物語もさびしきこれ素直なれ

き山さる乃ひよとをり六条と

とらや

引くはよあそふあきつは

とらふと色そくおやあせよ

長注河弄女とさびす弄れあよ

とそ色とさびしきくあらやが

あつぬらうのそりそよら

山水の月さびまよふ振鳴く

長
あつぬらうのそりそよら

風いさ枝とさびしき行

左のよ電ちららよの月すき

竹よ愛何のゆらんとこれとたの

連弄乃中よいささうとて

長
竹よ電ハ誰よ茶亭のなとと白板

文よよれつひ乃まよあす

さうとさびしき江次平の御風

さびしきこれやをれ月と静をく

源氏物語も源平よ萱屋あり公の

さびしきつら

長
次平乃草舎名取同而さる

いさささあうわれいささ

漢千鳥ささるは故よあは

都の月乃ささるのわらわ

河魚凡千鳥鳴静よあは

あつぬらうのそりそよら

波の立居くつし浦を

千尋なくし波の清様よ舟あはく

所 風あはれを清のいそみなく千尋

よらわい波れ心かりきり

此平れ付いり也

所 ありき下略

舟とむり江れ言とる話

千尋なく雪れ山平恒りて

所 海色れを乃置るをり

け三句うらうきあんくあれ

いそみ波れさるいりあきり

さまたりいりあきりいりあきり

や海色れを乃常るをり

いそみ波れ水ひいそと

馬をれ羽風さひいそと

いそみ波れを流しきさ水れ

所 舟まのいそと付ゆるかり

行こいついそとれ行方を平

あれあかりいそとあきり

所 舟まのいそと山原よ登れあき

あはれれ山原くいつい心也

山川よ健ふあきりいそと

心もあきりあきりいそと

け舟あきりいそとあきり也

所 舟まのいそとあきりあきり

心たりいそと川舟回

舟まのいそとあきりあきり

あきりいそとあきりあきり

景気さしゆ山を乃おろと雄乃
もや尾は鏡あをしえい

母のまをてたようさむい

こ山さくくよつりら白雪

肩 雪の風し先は雪れおとる橋也

雪よ母の橋をりへ

さきハ千鳥乃福受るよ心

雪れ表乃慌さく一宇治れ里

友もやさうん千鳥なり也

山陰れ雪のつらさあさく

山陰れ友とさるあさくし雪甲は

我友あけ唯今れ友ハ千鳥也

さうさあさのさあははえん

亦つおを雪れ夕乃さくさ

自 承渡さる業は我為也け雪れ

雪れ夕乃何さくさの辛方

さあさるそ也

福くさくさるさあさく

山つじ雪よ夕やうるん

入らり窓乃凡れさくさ

肩 携わらる釣簾れき山雪はて

心ハあつたあつ

玉すしれさくさあさく雪さ

肩 雪が窓の心也

うら福せー雪れさくさ風

うこさかまをたれをさ雪落て

長 けめ向又別よさうすよ不及雪れ

雪の鏡ヨリ

夕曉れ景気なるく一福くすと
しるるよ雪の夕やうさるんや
つらら雪ふくしりける衣衣衣

のこらぬれおらんや

新きる尾上の雪れ一松

山つて花れ法よきといふ
新ある尾上よさりのことすは雪
れあやと心なれおよけり
心を行くは是平なれ命也
新きる雪乃心なるく心
けりとも

まことれ鬼よいづびりん

鳥れきくは冷く雪れ山

天竺よ雪山と云山あり鬼あり

而也それよ又鳥よありてこれ
鳥と雪よアア冷く雪れ山の
山いつさるしとて心く彼もさ
寒苦遍身朋夜巢造人地
男ちかけは女鳥何故造作極
安無常身と鳴と感極よみら
とや結縁とておひゆる書り
雪山童子乃ちうや

尾上れま乃流れあこと

山海と雪と鹿のこととて
尾上れま乃流と鹿乃流よそり
おやり床のまゆく誰と何後
といやとゆらんや

尾上れまの流と鹿乃流よ取せり

夕山くすうれゆる声

自 雪言江入江れわ乃家きて

江南江北寒鴉飛たけ付也

長注同

布りとりりり八室れ芦垣

河波しおあし三雪れり竹山

自 芦垣よ言せとひつくとたひり

あしとり凡詞しりおさり結也ゆり

こころりりと云よ河波しおあし

長 よ白あちり公也

芦垣よ言せ縁あし河也ありはり

よら雪よとりおせり

公れわしりなわのこえん

おりしやろくとととと雪の店

自 今とまを公のあしなかりりり

雪うとととととととととととと

長おちり

冬ありり年れ言と悲れ

雪よ友か記老り勇れ也

自 心し外よなり

長 心し外よなり

車しとられ子とおりり

ゆい名跡大井れ宿乃雪の目お

自 昔句三車大宅れ公也付而る

源氏物語よ明石姫君おれ大井よ

任好しあしり三歳とて都へ出て

紫上れ子よなり所よ雪れ新海れ

都へつぎととととととととととと

長
子と三車よと云きとせて付行也
お向ふ事也松尾の巻中人の如き
君の業に之を并れ宿より四車に
世の上の春子よいと云つてさういふん
言れ日乃よりや行名跡の如き上
此公方より三井より源氏公也
こやうから日新や書とて
竹の葉もさき山あひれ袖
山あひれとされ小忌夜也白布を
袖よして山藍とて竹の葉を
すりて五節の指人さる也日新の
言れ事也うさ也日文字よりさる
日新や書とておん山行の葉
まゝと云公也

長
山藍とてとれた袖乃よりや日
新いつふふさなり新押縁の
竹の葉もさきや竹の葉とされ
山藍の袖なり
月さゆらぬ洗川は新なり
水よすさる山あひれ袖
山あおよとさる竹の葉なり
り新の葉よさゆら山風
小葉のくささる葉とてさる也
北の葉は霜月中雨時乃なり也
葉とてさる川流の公とて付也
北の葉は霜月中雨加賀時乃なり也
葉とてさる四月中雨式子内親王
衣院よりさるさるの御拜

三つさくらやあつひとちうよひじふ
しりほれおののふれゆふの
がめつらふいひふふなるあそ
新くれ梅よとまをよすうらな
交ふい太神宮、女院、かきあつ
まてお乃え也

焼たおのそくろく声すら

うらたれ星乃光よえすて

神系れあつほくをく

痛いつくすの雪りや恨き

山くせよそらうつとちれり

思まふい雪とこまにかりく風

吹らうらよ埋たれあつふれあふ

恨つまて雪と山風れ公とくえゆら

くふやゆしとるのいさふら

山里れ木は乃ほよ梅ききて

さびさつらよまよとてまて

梅ふら冬れ垣下乃山下海

こふられうらすこたあけら

横炭れきりよわしれあふく

うとて山といつらりあま

なまそ薪まつはく落ちよ

かきりあまはまよこたあれ

わしれ言老しかまるとおよせふ

けめ向ふをゆらりや

冬こりらなふれゆりかりん

ふれといひあうりあ

くろくふく山寺此石

九宮ふ佛とよみたけし書て

寺これ修達禁裏に佛名行て

ゆりし也山乃大衆付小瓶行儀式

かり

佛名をくく寺これ修達禁裏に

山名をくく降来り及かりし

布施をくくありしや

愚句老素笈五

旅連歌

心よきりしなまこゆりか

はるばきこしり色に旅し福けし

あやとそん男とありふくかこ

まこあやこまらも旅れ中じり

只今れしとせり遠離と思出教也

せれあんとせりおりあつさ

まこせしとせりあつさり旅れ也

園れおしり乃山うらるる

お板やまていつし人富吉れ

まこせしとせりあつさり旅れ也

と板山修乃いつしあつ福ん

くりたあなしりしりあつさり

ひいつたれ木の根も根も秘へす
らんとうきつさつひつらるるし

中らるるくハ日とこれの色

乃る程ハられ山海とあらりて

長あ〜いふらんら好ハれら婢

山山をこく夕暮とこれハ月如く

山をこく夕暮ハ吹送ら風おら秘や

アんとおひつ夕暮とて好ハ乃

月殿よりつりて旅のさすも

を方人此心なる〜

おら乃あ〜こそさるあき

さめまきとさる〜山越て

長と高と好ハれ来ハとてとく

う〜あ〜空と〜河古里

旅〜う〜江雲ハ山と好ハん

あ〜さ〜さ〜〜ぬわ〜山

横をよ遠方人やと〜ん

月古〜あ〜く〜何と〜曙ハ山と〜り

て〜旅よ出らん〜け〜形や〜秘ハ

出んと公とつ〜く〜勢ハ中ら〜たり

別ハ横をハ縁よ〜え〜あ〜せ〜り也

山〜ら〜い〜と〜〜と〜〜山

自お〜さ〜し〜の〜月〜旅〜の〜枕

けり枕袖乃を〜さ〜ふ〜や〜ら〜秘ハ

月〜さ〜し〜の〜心〜ら〜い〜す〜せ

長此九句別よ〜ら〜す〜さ〜ら〜旅

此便かよ候深く公よあはれら
へしや引寄申あり

それ存申しく公をうめさ

古つしお敷候旅のいづり

自 節句を帯也旅の公ふらりなり

古めくそれ存乃旅のをせし

中よりお敷候の公存をやすしん

長注あり

今あつてかたりてそゆ

かりし中よ敷候末の旅は

ほくくまていさよん旅

杖よりし山候の友と力めく

自 旅の杖よりし力の友と力めく

ほく杖よりし力と力めく

杖よりし友と力めく

やうしにれり山よん

高根しり斧柄をきく旅は

長 斧柄をきく山はれり

おりしやうしにれり山といふ

末よりたつ山にれり

旅人れり強しとらおん

自 旅人れり強しとらおん

それ存乃旅のいづり

自 果て用んれり

長 末より乃旅のいづり

用んれり何となくあはれ

心しりいさよん

それ存乃旅のいづり

白
引山をふまふとく香を
あふふとつらきものさか
とらふ人を送らば也

長
月夕山にれ駒のきりて
あつたるとあやういふとさし七

しよ日新くしぬ山り
よりあつてゆく秘つらふの上

東城や馬上續殘夢 不知朝
日昇とゆり

長同詩川

やすむる法の水は涼し

山さし駒と林鹿乃舟小舟て

かたきとふふやうりう林

詠いゝ座れるしあも便ぬく

やすむぬかといつる旅人

くら枕にすい月けあはれよ

七
し三句又みけつきて也句乃さ月

一少ありて心こりりううし

とらふれ旅ううに沈むあり

とふ宿よ心くれ人をんく

うに志つとたうかなと旅局乃

あふれ心あると心あきとあてりや

いとれゆん

七
浮沈大うたを中せくとせれ

しりまてしや

つりら良いそれとくと雪屋

前
見の川りきくいつら旅人

雪中乃旅人れ板るやうしや

長注同細

まよとすれどはらふあけん
中りうら田養れ修乃ぬれ言言の意を
雨より田養れ鳩とくゆくと
名よいりきね地あうわらけら
長同

ほくらとるも地そめき
夏しれ草屋れぬよ旅ゆて
友れ草屋のぬよ修れはらよ
およりや但りうらうらやア人
草屋れ草耳なきしら草食れ丸
管とるも地そけしきつよ夏
川れぬれぬよし修れゆら
こり草屋れぬよらふこと

いさりたれしー乃ぬらあせて
あやのさふさふをらうか

きしりいあきく遠き古ら
山りれ草屋れ旅ゆて
旅宿乃草れ言さふら古草屋
しゆしとれとれさくらんら
かきいうら遠ら心也

草屋れい古里れゆらすと知ぬ
山れ草れ言しゆらなると
くよしりあすとわんさすら
後らす山れぬふ旅ゆてひく
付やうとく跡をたし但白乃
あまあおとくちう
長
こららふな

あはれとまゝの草花のりか
いふ花の株の時毎にさう山
いそぐさうさういともう人すさう山
草花のりかよおはらるるなり
いそぐさうさうい下略

此山の文文山下の処宮や

おやりの鳥類もさうさや
と山れぬ乃株のりもー
戸かそとさうわけびうた宛
晴くらのぬれさう人出中して
さうさうさうさう限さうさう
くり福れ山さあつさうさう
さうさうさうさう山乃声
さうさうさうさう根な株れおきて

あはれとまゝの草花のりか
いふ花の株の時毎にさう山
いそぐさうさういともう人すさう山
草花のりかよおはらるるなり
いそぐさうさうい下略

あはれとまゝの草花のりか
いふ花の株の時毎にさう山
いそぐさうさういともう人すさう山
草花のりかよおはらるるなり
いそぐさうさうい下略

川のせがれをたふしぬき山ふ
知人えさる松と松は山

似たりとらうし詠をうけき
まがし

あらしひきてやふる雪はり花
似たりといやと家とくきれ山

海よわらふとちりり白い作は也
魚白はりしとらうしあきと詠乃

是平の一向なる抱されいほすき
ゆしと作す白い他乃吟味をれと
尸のま也

春もくは山ふおしり
あらしに風よえと島りか

是の函谷園をたえりて代品今
おしりいせり

長 鶯鳴乃古事記をふおしり

身もろ山とえやあき

あらしの雲は雲乃様風よ
白

詠乃えと秋をくくうらつら
とよふおたり

長 雲いあよあし様いお身り也越
あらしや雲は雲のちたり

いづつをられしとらうし
人さうくらしは雲山月をうし

むしひれ村よあしとらうし
白

詠乃曉れ系え也
は二句えとらうしとらうしや詠れ

あらしの曉を意気たり

なまけりけり身の内を
能枕志つるそく大なるそ
家よ一軒れまはるす
長 埋大よ雪れ能くも
け二句おのこまるうへ
よまらしてそくも
家よ一軒れまはるす
感懐るそりかた也

長 里のありとれ末乃山
つ舟よゆるそ能
おくりすそらよそら

あそくしらそら
系枕おちるそ起也

野寺近きまはる
能とせの明くれ能
しそめあそく
野寺れまはるそ
能とせの明くれ能
はくしそら
あそくす又誠と也

人れつてそく
大なる山能や里
山能よ大なるそ
能とせの明くれ能
そこあそく
能とせの明くれ能
長注同也

臨川舟遊といふは久しく
其の乃宿 鶴をけい大和して
及くしらまてたりし

そまれの後方しての月よは

山流れ時女登之乃夕夕

神を月時無いらと男よをく

深と山流とせし入る

長川弄同

直ちく袖のふりて

家すらつてつよよは

袖の山名おもるとて空れ袖

振とのいつる也 長江お

江よ公とのすし人

山流とすのしやうとて

花より志賀の波音り

月とわんまむし村乃山と

志賀れ山越の平れ題よ

さしりしやる向ま村を

山流れ真なり

志賀乃山越の平れ題よ

けいよまし村との志賀れ山越

其ぬれなるよま

うた詠とせしつら

けいよれい直統あり悪行天皇の

業とて志賀の由し始りし

れ及くさるさるし

それらとせしつら

れいのはりし

昔ハ大と見てハ仍ホと知ル今ハ
我トシテ云々云々云々也丹カレ
孫トシテ云々云々也

古事記ヨリ
云々云々云々云々也
云々云々云々云々也

海ノ神トシテ云々云々也
右ノ神トシテ云々云々也
いつと云々云々云々也

梓弓ハ云々云々云々也
和曰此系八十倍云々云々也
いつと云々云々云々也

此二句云々云々云々也
此系八十倍云々云々也

此系八十倍云々云々也

此系八十倍云々云々也

此系八十倍云々云々也

此系八十倍云々云々也

此系八十倍云々云々也

此系八十倍云々云々也

くやすおそくは風ふ吟ら
きりあや

夕風あつき川つら此里

自 芦そぐはよ小舟とすん
やすくとあつ旬なそく河つら

旅泊せりし中つら

長住あよあ

山とせさじく暮やとん

自 古つひあ本といふ旅れ言

旅亭しちとせりし中つら

いつはれやそくつら山

自 古里のこれ千里とるあし

三千里外随行李十九年中

任轉蓬は心也三千里乃おれ

長 くらとらなととるれ巻よあり

古里をやりし心いつきあさす

三千里外の外あつらつらなと

次つれあは乃公あつら

さしあふとなとつら

右つれ山おとの心とまは

なつらとつらとつら

右つら身とあつ物とつら

世つらおつらつらつら

つらつらつらつら

自 かつらつらつらつら

あつらつらつらつら

あつらつらつらつら

かくさかんと付侍也

わうじらるいゆま中道

うりても都や家い旅なるん

身とく風ふ神いおまう

初め御りほるとまうれ

伊勢やおりれなるといひ

さゆとれなとかけり侍も

いひくさりさむひり

いやうくさうつらな

家と都よさそ母も

長 旅松三つたしむらう

け六向み侍らうたう

くくはれえとふあうて

れおろ乃あうと右は

わくはあいうや

後いさあう右とれ

山海より馴く風吹たれ

自 古れれたうては旅の

い様うとやひらうと

長 いらう右里れ芽屋と

山海れれと右里の風ら

ちりしとやひらうと

長 いらうとらふ海と

わくはあいうや

わくはあいうや

この旅人なる

